

五、 込 田

68

(一) 込田のできるわけ

込田は洪田とも溝田とも書かれるところもあり。これ等が耕田にかわっていくところに人の努力がうかがわれる。

69

ざる田は中洲村によくある。

込田に似たのが湖辺では沼田(トボケ)である。

込田・ざる田ともに洪水濁水にこまる田地である。

家棟川は又屋棟川とも書く。

70

このような川床をもつ川を天井川という。

「こんなに毎日雨が降り続くと込田が心配だ。」とお父さんが話されたので私はお父さんに「なぜ込田は他の田地が浸水しないのによく浸水するのですか」と問うと、お父さんは次のような説明をしてくださった。

「大体わが村の込田は富波込田の外に大字北にもあるよ。今は富波込田について説明をしよう。俗に「込田」といっているがあれは田の地名ではなく込田とは水が入り込む田と云う意味で、これと反対に「ざる田」といって「ざる」に水を入れるような田でいくら水を入れてもすぐ水がひつつく田のことでこの田の底は砂礫になっているのだ。

富波込田は東込田と西込田とに大別されて呼ばれている。東込田というのは西祇王井川の東沿岸を指し、西込田というのは西沿岸を指すのである。西込田の方が範囲も広く年中悪水が田地より排水しきったことのない沼のような込田が約二町歩ほどある。



(西 込 田)

この沼には古びた一隻の舟が浮び、沢山の雑魚がすんでいる。

この隣りには昔の条里制にゆかりのある、字八之坪、字五三条、字経田きょうでんなどの地名の土地がある。これが長雨ともなれば一面の「込田」となるのだ。

なぜこの土地が込田になるのか、その起因の第一は、家棟川にある。この川の上流は花崗岩の禿山で長い谷間は砂や石ころで埋り、谷を流れる水もかわら礫へ出るころには地下にもぐって一条の細い白砂の帯と化している。これが大雨ともなれば水無川は濁流となって土砂を多量に下流に押し流す。一雨ごとに川床は砂を増し、ついに家棟川の川床は童子川に比し十数尺の高い地点にあることになった。それで大雨ごとにこの家棟川の砂は上流の激しい濁流によって童子川の中へ落され童子川の流れを堰き止め、時にはこの濁水が逆流することさえ起る。

このように家棟川は沢山の砂を運搬してくる川であるので、昔の地図を見ると「砂川」すながわと書いている。

その第二は童子川にある。この童子川は水源を野洲町字市三宅の北部に発し、三宅井川、五ノ里井川、比江井川を合流し、字五三条の附近で西祇王井川に合流して更に家棟川を受け、祇王、中里、篠原、兵主を経て琵琶湖に入る延長二里余り(約一〇キロメートル)に及ぶ川

西祇王井川が童子川に入る河口は現在は一三つになつていて一番南側の込田の沼より流れる川を、俗に鉄砲川といひ、中の川を祇王井川、北側の川を俗に蜷川といっている。

で野洲方面の大小の川の水を受け入れる大きな川なのである。しかるにこの童子川の川幅は中流より下流の方が狭いという川で排水のいたって悪い川である。

第三は祇王井川にある。この川は灌漑用に人工でつくられたと伝えただけに野洲一体の諸川の余り水を一滴でも多く受けるように工夫されているが、大雨になれば増水して野洲駅前附近ですでに道路に水がはみでる状態である。

71 ここまで話せば込田のできるわけも大体わかるだろう。豪雨や長期の雨降りが起れば祇王井川は増水する。童子川も増水する。それが富波の字五三条の北で合流する。

ところがこの童子川はここが川幅が最も広く下流に行くにしたがって川幅が狭くなるので排水量よりも上流から流れる水量の方が多く童子川の水位は高くなるばかり、この合流点より数百メートル下った地点に童子川に対して丁字形に家棟川があって、濁水と共に家棟川の土砂は童子川の川中に流し込まれる。川底は次第に高くなり童子川の流れを堰止める。こうなると祇王井川の両岸は童子川の両岸より低いため、増水により水位は次第に高まり濁水は祇王井川の両岸を越して田地に入り込み、次第に浸地水域を拡めて一面濁水の海と化してしまう。これが込田なんだ。



(西祇王井川と童子川の合流点)

(二) 込田の耕作

72 毎年若干の浸水が必ずある上に排水が悪いのでこの附近の田地は一毛作地帯である。この若干の浸水被害を免れるため昔から畦作り^{うね}といって大きな高い畦をつくり、この畦の上に苗を植えて米を取る方法が用いられた。この畦の土は浸水の時悪水^{うまや}をうけて相当に肥えた土なので少量の泥藻などを施せば十分に米を収穫することが出来る。

畦の上まで浸水しない年は厩肥料^{うまや}で二石^{こく}程度の収穫がある。しかし「おはらい」といって稲の花盛りに稲頭まで浸水すれば一粒の米も収穫することができない。

込田の耕作は三四年に一回程度の皆無作や三分作の大被害をうけても他の年にこのような収穫があるから経営されているのである。

(三) 込田より耕田へ

中国揚子江の洪水による下流の地域の肥えているのと同じ。

北と永原下町との両
字の間にも東祇王井
川の流れている所に
「論場」がある。

浸水している日数や浸水地域面積を一概にいうことは不可能である。

浸水日数も軽い時は二三日で引くが十日以上も排水しないこともある。こういう時には若苗は腐ってしまう。

又西込田一五〇段、東込田一五〇段程度の浸水はたびたびあった。稀には五之里地先にまで浸水することがある。こうなると、五之里と比江、八夫の境を流れる童子川の岸は割合に低いため童子川より直接に五之里の地先に浸水せんばかりに増水してくる。そこで五之里の昔の村人は反対岸の地先である中里村字八夫の村人との間に浸水を防ぐため協定を結んだ。その協定の内容は「お互に勝手に協定した堤防の高さより自己堤防を高くしない」ということである。こうして定められた区域の場所を「^{ろんば}論場」といつている。したがって或程度以上の水位になれば「論場」の区域の堤防を濁水は越して八夫地先へ浸水していくことになるのである。

富波の浸水被害は年々相当莫大にのぼるのでこれを少なくするために多大な金額と莫大な労力奉仕をしている。

先ず家棟川の砂防のため毎年「坪取り」といって六尺平方の広さを一人分の分担として四五尺の深さまで砂を掘り取らせ沈砂地帯をつくらせた。この作業はかなりつらい労働であったと老人達は話している。又増水してくると濁流へ飛び入り川底の砂を浚えて流れをよくする「砂かき」作業も辛い危険な仕事であった。

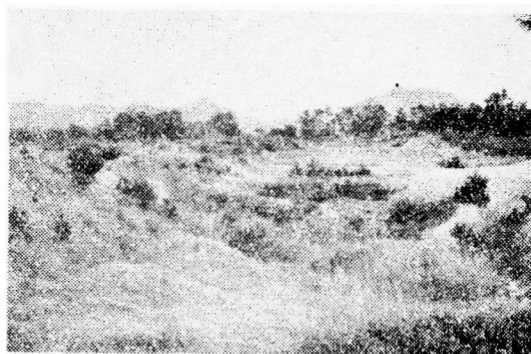
又家棟川からの「ニコ」を含んだ濁水が逆流して田に浸入する時これを防ぐため門樋を童子川に一箇所、祇王井川に二箇所を設けた。三宅川門樋、西込田門樋、東込田門樋といっていた。

門樋の仕掛は逆流して下流の濁水が登る時その水勢により二枚の扉が自然に閉じ逆流が止み、下流の水位が低くなれば上流よりの流す水勢が勝って二枚の扉は自然に開くのである。

積極策として明治十六年以後国庫の補助と県費を以て家棟川上流の花崗岩の禿山に砂防林を試みた。明治二十八年には童子川の合流地点に石造砂防工事を施した。

昭和に入り童子川の若干の改修はなされ、又童子川の改修を乞う声も高くなって来た。先年の家棟川の上屋附近の決潰により新家棟川の河川が掘られ、家棟川は廃川となったので排水もよくなり、昔設けられた門樋もいつしか廃止されてしまった。

こうして次第に排水がよくなり、大正初期には八之



(廃川になった家棟川)

二毛作
裏作ができる田

坪や経田、五三条辺の沼地帯には柳行李の原料になる柳の苗木を岐阜県より買入れたりして収益を計っていたが、今はその影もとどめす二毛作も可能の田地となって昔の込田の大半は裏作に菜種や麦を耕作している。全くの込田は約二町歩の沼地を除けばなくなって来た。

童子川が下流まで十分に改修された時は立派な本田となるので、その日も近き将来には必ずやって来る。